巻頭言

〝里〟の修行が大事

文　小林信翠

今の社会状況では
「何もかも放り出して逃げてしまいたい……」
そう思うことも無理からぬことでしょう。
しかし、仏法は逃げずに踏ん張る生き方を教えています。

新型コロナ禍（か）における光薫寺の取り組み

四月七日、ついに緊急事態宣言が出されました。対象地域は七都府県、私が住む福岡も含まれています。実はこれに先行して三月三十一日から光薫寺・末寺・別院すべてを自主的に封鎖（ロックダウン）して一切のお参詣をお断りし、御講・お助行などご信者宅を会場にする信行活動も休止にしていました。お寺は社会的責任の一端を担っていることを自任している以上、医療崩壊や命の選別といった悲惨な事態が起こらないように率先して行動する必要を感じたからです。とはいえ、苦渋の決断でした。

光薫寺には平日なら一日を通して一八〇名ほど、土日祝日で二五〇名ほどの参詣者があり、末寺・別院も含めると一日あたり三〇〇～四〇〇名の出入りがあります。それを自らロックダウンしてしまったので、ご信者の皆さまには大変ご心配とご迷惑をおかけしております。封鎖後は朝のお勤めは寺内に住んでいる教務（僧侶）とその家族のみで行い、毎朝の御法門は従来と変わらずＹｏｕＴｕｂｅ（ユーチューブ）で配信、日中は教務部全員で「新型コロナ早期終息千本祈願」（お線香一本四十分×千本分の祈願口唱）をさせていただき、その様子も終日ライブ配信しています。熱心なご信者はパソコンやスマートフォンを御宝前のそばに置いて、ご一緒にご祈願してくださっているとのこと。その信心ぶりには本当に頭が下がります。

とはいえ、普段お参詣される方のおよそ七割はインターネットを日常的に使わない方や高齢者です。また、こんな時こそお寺に行きたいのに行けないというお声もいただきました。そこで教務が手分けして一日あたり五〇～六〇軒の

ご信者に何らかの形で連絡を取っています。一斉にというのも難しいので、①お一人暮らしの高齢者、②高齢者を抱えたご家族、③お一人暮らしで不安を抱えがちな方、④病み上がりの方、⑤気になる方々を優先し、電話口で安否や心身の状態をうかがい、必要であればソーシャルディスタンスを取りながら直接訪問、本山から送っていただいたお供水をお届けしています。また特に対面してのお助行が必要な場合は感染防止対策をしながらご奉公させていただいております。

外出自粛でできないことが多い中でも、できることを考えて工夫する。これもまた新しい発見と気付きがあり楽しくもあります。とはいえ、一日も早い終息をただただ祈るばかりです。

定業・不定業

コロナ禍は仏教的に考えると、どのような事態と捉えられるのでしょうか。それはズバリ「業の報い」です。感染が世界中に拡大する、つまりこの世にはどこにも逃げ場がないわけです。これを仏教では「業」といいます。俗にいうところの宿命という意味ですが正確には違います。宿命は変えることはできませんが、業は私たちの言動を変えることで良いものへと変えていくことができます。（詳しくは本誌二十八頁参照）

業にも、皆が共有している「共業」と共有していない「不共業」とがあります。今回は世界規模の感染拡大ですから、共業であることは間違いありません。その中でも直接被害を被った人もいれば、間接的に影響を受ける人もいるのは、人それぞれ固有の不共業があるからです。

業はその報いの強さによっても分けられます。逃れようのない業を「定業」、いつ報いが来るのがわからない弱い業を「不定業」と言います。しかし、いずれも仏道修行の功徳によって変えていけると仏法には説かれています。

中国天台宗妙楽大師の法華文句記には、

「若し其の機感厚きは定業も亦能く転ず」

とあり、正しく仏道を修行すれば必ず定業も良くなるといわれ、さらに日蓮大士は、

「定業すら能能懺悔すれば必ず消滅す。何に況や不定業をや」（可延定業書）

と仏法にのっとって自分の心を磨いていけば定業は消滅するのだから、ましてそれよりも力の弱い不定業は吹き飛んでしまうと教えられました。

妙楽大師のいう「機感厚き」、日蓮大士の「能能懺悔すれば」とは南無妙法蓮華経を口に唱え、自分の心を「今、ここ」に取り戻し、物事に対処していく勇気を持つことです。いきなり大きなことはできませんが、地道にコツコツ続けていけば必ず定業能転した人生になると励ましてくださっています。

松雪先生

私が保育園卒園時の先生は松雪眞紀子先生です。先生は、私たちが鳥栖のお寺に引っ越した後、父が創設した、ちくし幼稚園（現・あさひ幼稚園）に教諭として着任され、後に園長先生になられました。退職されて新たに保育園を二カ所開園され、息子さんたちがあとを引き継いでおられます。

私が小学校に入る直前のこと、同級生のKくんが事故で亡くなりました。お父さんとおじさ

んに連れられて海釣りに行ったときに、運悪く高波にのまれてしまったのです。当時は子どもですから人が亡くなることについてピンときてなかったのですが、ご遺族はもちろん、周りの大人たちが大きな悲しみに包まれたことは想像に難くありません。私も子を持つ親となり、ようやくその頃の親御さんのお気持が少しは分かる年となりました。六年前、松雪先生にお声を掛け、ささやかですが二人でKくんの三十七回忌をさせていただきました。

その後、たまたま同じ町内に別の同級生Nくんが住んでいることがわかり、最近よく交流しています。画家になったNくんは自宅で絵画教室を開く一方、NPOを立ち上げ民間で学童保育事業を行っていますので、何かと地域づくりのことで意見交換をすることが多いのです。Kくんの四十三回忌に当たる今年はNくんにも声をかけて、松雪先生と三人でご回向させていただきました。

終わった後、先生の個人的なお話を初めてお聞きしました。先生には四人のお子さんがいらっしゃるのですが、子育て、家事、仕事に追われていっぱいいっぱいになった頃があったそうです。たびたび胸が苦しくなって、水の中で溺れるような気分に襲われることがあり、そのたびにKくんが亡くなる姿を想像してはさらに苦しくなって、何も考えることができなくなりました。気がつくと、鳥栖の自宅から幼い子どもたちの手を引いて、福岡の九大病院まで行ってしまったこともあったそうです。

そのことを父・日元上人に相談すると、「松雪先生、逃げたらいかんよ。逃げたらいかん。すべて放り投げて山にこもっても何も解決しないからね。今、自分がいるところが修行をするところだと思って、そこで頑張りなさい。家事をするのも修行、お姑さんにお仕えするのも修行、子育ても修行、御題目を唱えながらやればきっとできるようになるよ。山ごもりじゃなくて〝里〟の修行を大事にしなさい」と言われたそうです。

先生はそこでハッと気が付き、言われたとおり、何事をするにも「南無妙法蓮華経」と口で唱えたり、心で唱えたりしながら取り組むうちに、胸が苦しくなったり、頭がボーッとする症状がいつの間にか消えていたとお話しくださいました。

くしくも緊急事態宣言が出された四月七日はKくんの祥月命日。四十年以上たった今も、憂き世に生きる私たちを応援してくれているのかと感じざるを得ません。

長松清風（日扇聖人）の教え歌

たへられじ　あなたへられじ　よの中よ
さりとていづこ　のがるべき道

（現代語訳：「堪えられない、嗚呼、とても我慢ができない世の中だ」と言っても、さて、この世のどこに逃れる道があるというのだろう。そんなものはないよ）

小林信翠／光薫寺住職
昭和四十六年生まれ
平成二十七年より
光薫寺住職としてご奉公中
趣味はマラソン